

# 異文化コミュニケーションにおける大学生の自己開示に関する比較研究：日中韓大学生の比較を中心に

著者	目黒 恒夫, 會澤 まりえ, 吳 正培, 黄 梅英, 孟 慶栄, 孫 成志
雑誌名	尚絅学院大学紀要
巻	(74)
ページ	45-61
発行年	2017-12-20
URL	<a href="http://doi.org/10.24511/00000337">http://doi.org/10.24511/00000337</a>

# 異文化コミュニケーションにおける 大学生の自己開示に関する比較研究 －日中韓大学生の比較を中心に－

目黒 恒夫\*・會澤まりえ\*・呉 正培\*\*  
黄 梅英\*・孟 慶榮\*\*\*・孫 成志\*\*\*

A Comparative Study on Japanese, Chinese and  
Korean University Students' Self-Disclosure in Intercultural Communication

Tsuneo Meguro, Marie Aizawa, Jeongbae Oh,  
Meiying Huang, Qingrong Meng, Chengzhi Sun

日中韓3カ国の大学生の自文化における自己開示の傾向には開示行動、開示意向、開示方法について多くの共通点がみられるが、開示動機については相違点がみられる。その傾向の日中韓比較においては各々の特徴も見出される。これらの相違や特徴を背景とした異文化コミュニケーションにおける自己開示に際して、戸惑い、誤解、文化差などが経験される。各々の自己開示は、言語的制約を内包しつつ、文化的社会的制約を常に負う。また、文化的な相互依存と文化的な相互対峙が地球規模で急速に進んでいるグローバル化の状況に人間は直面している。それゆえに、文化的社会的制約を負いつつも他者を他者性として自覚し、対話的な自己開示を遂行していく人間としての在り方が絶えず問題になる。自己開示を通して人間の人間性を問題にし続けること、多文化社会に生きる人間としての在り方を絶えず志向することが大学教育において要請される。

キーワード：異文化コミュニケーション 日中韓比較 自己開示 開示性 対話

## 序

異文化コミュニケーションの初期段階に頻繁に現れる問題の一つに「自己開示」(self-disclosure)の様態がある。自己開示の仕方、内容、程度などに対する戸惑い、違和感、理解し難さ、あるいは誤解などは、今日のグローバル社会における多文化共生に影響を及ぼす問題である。

---

2017年9月13日受理  
\* 尚綱学院大学 教授  
\*\* 尚綱学院大学 講師  
\*\*\* 大連理工大学 副教授

自己開示は、榎本によれば、臨床心理学者ジュラードによって初めて心理学用語として用いられた概念である<sup>1</sup>。ジュラードは自己開示を次のように定義している。自己開示とは「他者に個人的な情報を知らせる行為<sup>2</sup>」であり、「開示するとは、覆いをとること、明らかにすること、あるいは示すことである。自己開示は、自分自身を明らかにする行為であり、他者が知覚しうるように自分を示す行為である。<sup>3</sup>」

このような自己開示の心理学的研究は、ジュラード以来、「自分自身について他者に語る行為、すなわち自分についてどのくらい他者に話すかを問題にしている<sup>4</sup>」とされる。その際、榎本は、言語的な自己開示だけでなく、表情やしぐさなどの非言語的な自己開示も問題になることを指摘しつつも、これまでの自己開示に関する研究においては「自分自身について他者に語る行為」を自己開示と捉えていることから、彼自身もまた自己開示を「自分がどのような人物であるかを他者に言語的に伝える行為<sup>5</sup>」と定義している。このような定義に基づく自己開示の心理学的研究は、臨床心理学においては心理治療の際の患者と治療者の自己開示の意義の面から、社会心理学においては人間関係における自己開示の相互性や機能の面から、自己開示の相手・場面・内容（話題）・程度・動機などに基づいて様々な視点から研究が深められている。

他方、異文化間の自己開示の比較研究は、横田（1991）の先駆的な研究が挙げられる。ここで彼は、「自己開示と異文化間の要因を扱ったものは少なく、豊前ら（1990）の他にはほとんど見あたらない<sup>6</sup>」と指摘し、留学生（アジア系）と日本人学生の友人関係を自己開示の点から質問紙調査によって考察し、自己開示の内容と程度の相違に由来する友人関係形成の問題を示唆している。勿論、比較文化的な研究それ自体は従来からなされているが、今日のグローバル化における異文化コミュニケーションの視点で自己開示に関わる問題を考察することは、最近になってようやく始められた比較研究である。主な研究としては、石橋（2009）による協働活動を通じた日本人学生と留学生の自己開示の変容に関する研究、顧（2010）による日本人学生と中国人学生の自己開示の動機と方法の比較研究、全（2010）による初対面の相手に対する日本人学生と韓国人学生の自己開示の内容の比較研究、一二三（2010、2013）による日本人学生と中国人学生の自己開示に関わる自己観及び文化差の比較研究などが挙げられる。これら異文化に関わる自己開示の研究は、調査対象も調査方法も多様であり、異文化の自己開示に対する考察結果に相違があることも見受けられるが、異文化コミュニケーションにおける自己開示の問題をより深く考察する手掛かりとして有意義な比較研究である。

本稿においては、これらの先行研究を踏まえつつ、自己開示を「自己に関する情報を、言語を介して他者に伝達する行為」として暫定的に定義し、同じアジア文化圏においても自己開示の様態は異なるのか、それが異文化コミュニケーションにどのような影響を及ぼしているのか、

<sup>1</sup> 榎本博明『自己開示の心理学的研究』北大路書房、1997年、i～ii頁。

<sup>2</sup> Jourard, S.M., *Self-disclosure: An Experimental Analysis of the Transparent Self*, Wiley-Interscience, New York, 1971, p.2

<sup>3</sup> Jourard, S.M., *The Transparent Self. Revised Edition*, Van Nostrand Reinhold, New York, 1971, p.19

<sup>4</sup> 榎本、上掲書、iii頁。

<sup>5</sup> 同書、iii～iv頁。

<sup>6</sup> 横田雅弘「自己開示からみた留学生と日本人学生の友人関係」『一橋論叢』第105巻第5号、60頁、1991年。豊前貴子・犬淵憲一・中村雅知「自己開示に関する研究－日本人大学生と留学生の比較－」『東北大学学生相談所紀要』第17号、1990年。

そして自己開示にはどのような課題が現れてくるのかを考察する。具体的には、1) 日中韓の3ヵ国大学生を対象として自文化における自己開示の行動・意向・方法・動機について信頼性を有する諸尺度に基づいて多面的な量的調査を行い、各々の自己開示の傾向と相違を把握し、2) 留学経験を有する日中韓大学生を対象として質的調査を行い、これらのケーススタディによって異文化間の自己開示に関わる意識と問題を析出し、3) 自己開示それ自体の意味内実の問題及び異文化コミュニケーションにおける自己開示の課題を考察する。

## 1 日中韓大学生の自己開示の傾向と相違

### 1. 1 調査概要：質問紙調査

#### (1) 目的と内容

日本人、中国人、韓国人の自己開示にどのような傾向や特徴があるのかを明らかにするために、3ヵ国の大学生を対象に質問紙調査を実施した。質問紙は、自己開示の4部分（開示行動、開示意图、開示方法、開示動機）と属性で分けている。

#### ①開示行動：自己開示の程度、2相手×15話題

相手が親しい友人の場合と初対面の人の場合に分け、それぞれ15話題を提示し、自分のことをどの程度話すのかを5段階（1～5）で測定した。15話題は、Jourard & Laskow（1958）と横田（1991）の項目の一部と独自に追加した項目で構成されている。

#### ②開示意图：自己開示の意欲、5状況×2項目

遠藤（1989）の「開示状況質問紙」の短縮版を作成し使用した。5つの状況を2項目ずつ提示し、各状況でどの程度自分のことを話したいと思うのかを6段階（1～6）で測定した。個人的状況は知人や友人と一緒にいる場面、社会的状況は初対面の人と一緒にいる場面、非日常的状況は飲み会など日常性から離脱した場面、密接的状況は恋人と一緒にいる場面、家族的状況はクラスや家庭など1次集団の中にいる場面を指している。

#### ③開示方法：適切な自己開示のあり方、3方法×3項目

森脇・坂本・丹野（2002）の「適切な自己開示尺度」の短縮版を作成し使用した。3つの方法を3項目ずつ提示し、各方法を使う頻度を4段階（1～4）で測定した。文脈等配慮は話の流れや相手の都合などを考慮する方法、聞き手選択は相手への信頼度や相手との仲の良さなどを考慮する方法、時間及び場所選択はタイミングや場所の適切さなどを考慮する方法を指している。

#### ④開示動機：自己開示の理由、3動機12項目

小口（1990）の「自己開示動機質問紙」をそのまま使用した。3つの動機12項目を提示し、各動機が当てはまる程度を5段階（1～5）で測定した。意図性動機は他者との関係を調整するための開示、規範性動機は自分を取り巻く状況や規範による開示、感情性動機は自分の感情の抑揚による開示を指している。

#### ⑤属性：性別、年齢、学年、専門、渡航経験

#### (2) 有効回答者の内訳

日本調査は2016年4月18～26日に3大学の学部生366名を対象に行った。中国調査は2016年4月15～22日に大連理工大学の学部生333名に実施した。韓国調査は2016年5月19

日～6月8日に4大学の学部生289名を対象に行った。回収した回答のうち記入漏れの多いものを除き、最終的には、日本人大学生316名、中国人大学生285名、韓国人大学生268名の回答を分析の対象とした。有効回答者の内訳を表1～3に示す。

表1 日本調査の有効回答者内訳 % (人)

性別		所属大学			
男性	女性	尚綱学院大	九州大	麗澤大	
43.1 (134)	56.9 (177)	38.0 (120)	32.3 (102)	29.7 (94)	

  

専攻		学年			
文系	非文系	1年生	2年生	3年生	4年生
74.5 (231)	25.5 (79)	46.8 (146)	25.0 (78)	23.1 (72)	5.1 (16)

表2 中国調査の有効回答者内訳 % (人)

性別		専攻		学年	
男性	女性	文系	非文系	1年生	2年生
74.0 (211)	26.0 (74)	20.7 (59)	79.3 (226)	96.5 (275)	3.6 (10)

表3 韓国調査の有効回答者内訳 % (人)

性別		所属大学			
男性	女性	高麗大	培材大	東儀大	釜山教育大
51.9 (136)	48.1 (126)	33.2 (89)	32.8 (88)	17.5 (47)	16.4 (44)

  

専攻		学年			
文系	非文系	1年生	2年生	3年生	4年生
89.1 (237)	10.9 (29)	26.2 (70)	32.6 (87)	18.0 (48)	23.2 (62)

## 1. 2 調査結果

### (1) 日中韓大学生の自己開示の傾向

#### ①開示行動

##### a. 親しい友人に対する自己開示

日中韓大学生の親しい友人に対する話題別自己開示度の平均をそれぞれ求めた。その結果、日本人大学生の15話題全体の平均は3.45であり、「ある程度話す(3)」と「かなり話す(4)」の中間程度であった。自己開示度が非常に高かったのは「趣味(4.09)」と「年齢(4.05)」であり、平均が4を上回っていた。一方、「家庭」と「意見」は平均が3を下回っており、自己開示度が低い内容といえる。中国人大学生の15話題全体の平均は3.3であり、「ある程度話す(3)」を少し超える程度であった。自己開示度が最も高かったのは「年齢(3.82)」であった。次に「趣味(3.68)」「大学(3.55)」「勉強(3.53)」の平均が3.5を上回っていた。一方、「家庭」と「金銭」は平均が3を下回っており、自己開示度が低い内容といえる。韓国人大学生の15話題全体の平均は3.57であり、「ある程度話す(3)」と「かなり話す(4)」の中間程度で

あった。自己開示度が最も高かったのは「趣味 (4.10)」であり、次が「年齢 (3.99)」と「大学 (3.92)」で4に近い値を示している。一方、「家庭」と「心傷」は平均が3を下回っており、自己開示度が低い内容といえる。

横田 (1991) に基づき、15 話題のうち「将来」「目標」「勉強」「大学」「趣味」「意見」を志向的領域、「人間関係一般」「異性関係」「心傷」「身体」「家庭」を関係的領域に分類し、日中韓大学生における話題の領域別自己開示度の平均をそれぞれ比較した。対応のある t 検定の結果、日中韓大学生のいずれにおいても志向的領域の自己開示度が関係的領域より有意に高かった ( $p < .001$ )。

#### b. 初対面の人に対する自己開示

日中韓大学生の初対面の人に対する話題別自己開示度の平均をそれぞれ求めた。その結果、日本人大学生の15 話題全体の平均は1.98であり、「少ししか話さない (2)」程度であった。自己開示度が最も高かったのは「年齢 (3.18)」であり、次が「趣味 (2.70)」であった。一方、「家庭 (1.45)」「心傷 (1.48)」「異性関係 (1.49)」については、自己開示度が非常に低かった。中国人大学生の15 話題全体の平均は1.91であり、「少ししか話さない (2)」を下回っていた。自己開示度が最も高かったのは「年齢 (2.53)」であり、次が「趣味 (2.25)」「大学 (2.15)」「勉強 (2.15)」の順であった。一方、自己開示度が最も低い内容は「家庭 (1.57)」であった。韓国大学生の15 話題全体の平均は1.87であり、「少ししか話さない (2)」を下回っていた。自己開示度が最も高かったのは「年齢 (2.85)」であり、次が「趣味 (2.50)」であった。一方、「家庭 (1.23)」「心傷 (1.24)」については、自己開示度が非常に低かった。

対応のある t 検定を用いて日中韓大学生における話題の領域別自己開示度の平均をそれぞれ比較した結果、日中韓大学生のいずれにおいても志向的領域の自己開示度が関係的領域より有意に高かった ( $p < .001$ )。

#### c. 親疎関係による自己開示の相違

親疎関係による自己開示度の違いを検討するため、日中韓大学生の親しい友人と初対面の人に対する15 話題の平均をそれぞれ比較した (対応のある t 検定)。その結果、日中韓大学生のいずれも全ての話題において初対面の人より親しい友人に対して自己開示度が高いことが認められた ( $p < .001$ )。

#### ②開示意图向

日中韓大学生の状況別項目合計の平均をそれぞれ求めた。その結果、日本人大学生の開示意图向度が最も高いのは密接的状況 (8.50) であり、次が個人的状況 (7.65) と家族的状況 (7.61) であった。社会的状況 (5.91) での開示意图向度が最も低かった。中国人大学生の開示意图向度が最も高いのは密接的状況 (8.53) であり、次が家族的状況 (7.46)、非日常的状況 (7.06)、個人的状況 (6.46) の順であった。社会的状況 (5.83) での開示意图向度が最も低かった。韓国大学生の開示意图向度が最も高いのは密接的状況 (9.14) であり、次が家族的状況 (7.34) であった。社会的状況 (4.46) での開示意图向度が最も低かった。

#### ③開示方法

日中韓大学生の方法別項目合計の平均をそれぞれ求めた。その結果、日本人大学生に最も選ばれたのは聞き手選択 (10.03) であり、次が文脈等配慮 (9.31) であった。中国人大学生に最も選ばれたのは聞き手選択 (9.06) であった。次の文脈等配慮 (8.15) と時間及び場所選択 (8.10) は平均が近い値を示していた。韓国大学生には聞き手選択 (10.02) が最も選ばれており、

次に文脈等配慮 (9.45) が好まれていた。

④開示動機

日中韓大学生の動機別個人得点をそれぞれ求めた。個人得点は、動機別に当該項目（意図性5項目、規範性4項目、感情性3項目）の平均を求め、個人における各動機の占める比率を計算したものである。分析の結果、日本人大学生の自己開示には、意図性 (0.339)、規範性 (0.333)、感情性 (0.328) の3つの動機が比較的均等に関わっていることがわかった。中国人大学生は、規範性動機 (0.349) の個人得点が最も高く、状況や規範によって開示する傾向が相対的に強いことが窺えた。韓国人大学生は、感情の抑揚による開示傾向 (0.347) が相対的に強く、状況や規範による開示傾向 (0.322) が相対的に弱いことがわかった。

(2) 日中韓大学生の自己開示の比較

①開示行動

まず、日中韓大学生の自己開示度を比較するため、親しい友人と初対面の人に対する各国大学生の15話題全体の平均を求め、分散分析と多重比較 (Tukey) を行った。その結果、親しい友人に対しては日中韓に有意差が認められた ( $F(2, 5.05) = 9.77, p < .001$ )。韓国人大学生 (3.57) と日本人大学生 (3.45) は、中国人大学生 (3.30) に比べ、親しい相手への自己開示度が高かった。一方、初対面の人に対しては有意差がみられなかった ( $p > .05$ )。

次に、日中韓大学生の話題別自己開示度を比較するため、各国大学生の15話題の平均を求め、分散分析と多重比較 (Tukey) を行った。その結果を表4と表5に示す。

表4 日中韓大学生の親しい友人に対する話題別自己開示度についての分散分析結果

	日本人 大学生 (J) N = 316	中国人 大学生 (C) N = 285	韓国人 大学生 (K) N = 268	分散分析	多重比較の 結果
将来	3.54 (0.99)	3.35 (1.03)	3.81 (0.91)	$F(2, 14.59) = 15.21^{***}$	$K > J > C$
目標	3.44 (1.06)	3.35 (0.99)	3.70 (0.88)	$F(2, 9.29) = 9.57^{***}$	$K > J, C$
勉強	3.53 (0.95)	3.53 (1.03)	3.51 (1.04)	$F(2, 0.02) = 0.02$	
大学	3.73 (0.99)	3.55 (1.09)	3.92 (0.96)	$F(2, 9.30) = 9.00^{***}$	$K > C$
趣味	4.09 (0.93)	3.68 (1.08)	4.10 (0.91)	$F(2, 16.81) = 17.73^{***}$	$J, K > C$
意見	2.92 (1.14)	3.28 (1.13)	3.30 (1.18)	$F(2, 13.46) = 10.14^{***}$	$C, K > J$
人間関係一般	3.61 (1.11)	3.21 (1.04)	3.75 (1.09)	$F(2, 22.58) = 19.40^{***}$	$J, K > C$
異性関係	3.40 (1.17)	3.07 (1.08)	3.45 (1.25)	$F(2, 11.83) = 8.67^{***}$	$J, K > C$
心傷	3.11 (1.18)	3.06 (1.07)	2.97 (1.29)	$F(2, 1.53) = 1.11$	
身体	3.13 (1.10)	3.06 (1.10)	3.42 (1.11)	$F(2, 10.37) = 8.49^{***}$	$K > J, C$
家庭	2.88 (1.19)	2.91 (1.13)	2.71 (1.27)	$F(2, 3.34) = 2.32$	
金銭	3.07 (1.12)	2.98 (1.14)	3.19 (1.16)	$F(2, 3.31) = 2.56$	
性格	3.62 (1.08)	3.40 (1.07)	3.87 (0.96)	$F(2, 14.76) = 13.62^{***}$	$K > J > C$
年齢	4.05 (1.21)	3.82 (1.20)	3.99 (1.12)	$F(2, 3.99) = 2.86$	
感情	3.63 (1.04)	3.23 (1.15)	3.82 (0.98)	$F(2, 25.07) = 22.33^{***}$	$J, K > C$

Tukeyの多重比較。表中の数値は平均、( )内の数値は標準偏差を表す。\*\*\* $p < .001$

親しい友人に対しては10話題において自己開示度の有意差が認められた。「趣味」「人間関係一般」「異性関係」「感情」については日韓大学生が中国人大学生より高かった ( $p < .001$ )。「将来」「性格」は韓国人大学生、日本人大学生、中国人大学生の順に高く、「目標」「身体」は韓国人大学生が日中大学生より高かった ( $p < .001$ )。「意見」は中韓大学生が日本人大学生より、「大学」は韓国人大学生が中国人大学生より高かった ( $p < .001$ )。

初対面の人に対しては9話題において自己開示度の有意差が認められた(表5)。「趣味」「感情」は日韓大学生が中国人大学生より高かった ( $p < .001$ )。「心傷」は中国人大学生、日本人大学生、韓国人大学生の順、「年齢」は日本人大学生、韓国人大学生、中国人大学生の順に高かった ( $p < .001$ )。「家庭」は日中大学生が韓国人大学生より高かった ( $p < .001$ )。「意見」「人間関係一般」は中国人大学生が韓国人大学生より、「異性関係」は中国人大学生が日本人大学生より、「性格」は日本人大学生が中国人大学生より高かった ( $p < .05$ )。

表5 日中韓大学生の初対面の人に対する話題別自己開示度についての分散分析結果

	日本人	中国人	韓国人	分散分析	多重比較の結果
	大学生 (J)	大学生 (C)	大学生 (K)		
	N = 316	N = 285	N = 268		
将来	1.91 (0.90)	1.85 (0.86)	1.88 (0.92)	F (2, 0.26) = 0.33	
目標	1.85 (0.89)	1.92 (0.88)	1.97 (0.93)	F (2, 1.16) = 1.44	
勉強	2.12 (0.90)	2.15 (1.02)	2.09 (0.97)	F (2, 0.20) = 0.22	
大学	2.27 (0.95)	2.15 (1.04)	2.21 (0.97)	F (2, 1.05) = 1.08	
趣味	2.70 (1.02)	2.25 (1.00)	2.50 (1.07)	F (2, 15.00) = 14.23***	J, K > C
意見	1.87 (0.93)	1.93 (0.93)	1.73 (0.88)	F (2, 2.87) = 3.43*	C > K
人間関係一般	1.67 (0.95)	1.73 (0.95)	1.51 (0.76)	F (2, 3.46) = 4.33*	C > K
異性関係	1.49 (0.80)	1.68 (0.93)	1.51 (0.79)	F (2, 2.99) = 4.21*	C > J
心傷	1.48 (0.83)	1.72 (1.01)	1.24 (0.56)	F (2, 16.20) = 23.83***	C > J > K
身体	1.65 (0.92)	1.78 (1.00)	1.69 (0.87)	F (2, 1.20) = 1.38	
家庭	1.45 (0.80)	1.57 (0.95)	1.23 (0.55)	F (2, 8.24) = 13.28***	J, C > K
金銭	1.66 (0.93)	1.68 (0.96)	1.53 (0.77)	F (2, 1.85) = 2.33	
性格	2.22 (1.02)	1.98 (1.05)	2.13 (1.02)	F (2, 4.42) = 4.18*	J > C
年齢	3.18 (1.51)	2.53 (1.44)	2.85 (1.41)	F (2, 31.42) = 14.87***	J > K > C
感情	2.12 (1.02)	1.66 (0.89)	1.96 (0.93)	F (2, 16.26) = 17.92***	J, K > C

Tukeyの多重比較。表中の数値は平均、( )内の数値は標準偏差を表す。\*\*\* $p < .001$ ; \* $p < .05$

さらに、15話題を志向的領域と関係的領域に分類し、日中韓大学生の話題の領域別平均を求め、分散分析と多重比較(Tukey)を行った。分析の結果、親しい友人に対しては両領域において自己開示度の有意差が認められた。志向的領域は韓国人大学生が日中大学生より高く( $F(2, 5.20) = 9.51, p < .001$ )、関係的領域は韓国人大学生が中国人大学生より高かった( $F(2, 3.18) = 4.01, p < .05$ )。初対面の人に対しては関係的領域のみ有意差がみられ、中国人大学生の自己開示度が日韓大学生より高かった( $F(2, 4.68) = 10.53, p < .001$ )。

## ②開示意图向

まず、日中韓大学生の自己開示意图向を比較するため、5状況10項目合計の平均を求め、分



分散分析と多重比較 (Tukey) を行ったが、各国大学生の開示意向度に有意差はみられなかった ( $F(2, 126.92) = 2.25, p > .05$ )。

次に、日中韓大学生の状況別開示意向度を比較するため、状況別項目合計の平均を求め、分散分析と多重比較 (Tukey) を行った。その結果を表 6 に示す。

表 6 日中韓大学生の状況別自己開示意向度についての分散分析結果

	日本人 大学生 (J) N = 316	中国人 大学生 (C) N = 285	韓国人 大学生 (K) N = 268	分散分析	多重比較の 結果
個人的状況	7.65 (2.08)	6.46 (1.99)	6.99 (2.07)	$F(2, 107.99) = 25.74^{***}$	$J > K > C$
社会的状況	5.91 (1.81)	5.83 (2.28)	4.46 (1.88)	$F(2, 186.01) = 46.64^{***}$	$J, C > K$
非日常的状況	6.41 (2.10)	7.06 (2.03)	6.83 (2.14)	$F(2, 33.67) = 7.69^{***}$	$C, K > J$
密接的状況	8.50 (2.46)	8.53 (2.49)	9.14 (2.30)	$F(2, 36.18) = 6.16^{**}$	$K > J, C$
家族的状況	7.61 (2.10)	7.46 (2.09)	7.34 (2.12)	$F(2, 5.12) = 1.16$	

Tukey の多重比較。表中の数値は状況別項目合計の平均、( ) 内の数値は標準偏差を表す。  
\*\*\* $p < .001$  ; \*\* $p < .01$

分析の結果、4 状況において開示意向度の有意差が認められた。個人的状況では日本人大学生、韓国人大学生、中国人大学生の順に高く、社会的状況では日中大学生が韓国人大学生より高かった ( $p < .001$ )。非日常的状況では中韓大学生が日本人大学生より高く ( $p < .001$ )、密接的状況では韓国人大学生が日中大学生より高かった ( $p < .01$ )。

### ③開示方法

日中韓大学生の自己開示方法を比較するため、開示方法別使用頻度の平均を求め、分散分析と多重比較 (Tukey) を行った。その結果を表 7 に示す。

表 7 日中韓大学生の開示方法別使用頻度についての分散分析結果

	日本人 大学生 (J) N = 316	中国人 大学生 (C) N = 285	韓国人 大学生 (K) N = 268	分散分析	多重比較の 結果
文脈等配慮	9.31 (1.64)	8.15 (1.80)	9.45 (1.43)	$F(2, 144.96) = 54.41^{***}$	$J, K > C$
聞き手選択	10.03 (1.79)	9.06 (1.93)	10.02 (1.68)	$F(2, 89.37) = 27.51^{***}$	$J, K > C$
時間・場所選択	7.83 (1.94)	8.10 (1.98)	8.07 (1.88)	$F(2, 6.67) = 1.78$	

Tukey の多重比較。表中の数値は方法別項目合計の平均、( ) 内の数値は標準偏差を表す。  
\*\*\* $p < .001$

分析の結果、2 つの方法において使用頻度の有意差が認められた。文脈等配慮と聞き手選択ともに日韓大学生の使用頻度が中国人大学生より高かった ( $p < .001$ )。

### ④開示動機

日中韓大学生の自己開示動機を比較するため、開示動機別個人得点の平均を求め、分散分析と多重比較 (Tukey) を行った。その結果を表 8 に示す。

表8 日中韓大学生の開示動機別比率についての分散分析結果

	日本人 大学生 (J) N = 316	中国人 大学生 (C) N = 285	韓国人 大学生 (K) N = 268	分散分析	多重比較の 結果
意図性	0.339 (0.047)	0.330 (0.034)	0.331 (0.053)	F (2, 0.01) = 3.56*	J > C
規範性	0.333 (0.057)	0.333 (0.041)	0.322 (0.054)	F (2, 0.01) = 4.75**	J, C > K
感情性	0.328 (0.065)	0.336 (0.041)	0.347 (0.061)	F (2, 0.03) = 8.41***	K > J

Tukeyの多重比較。表中の数値は動機別個別得点の平均、( )内の数値は標準偏差を表す。個別得点は個人における各動機の比率を表す。\*\*\* $p < .001$ ；\*\* $p < .01$ ；\* $p < .05$

分析の結果、いずれの動機においても有意差が認められた。意図性動機は日本人大学生が中国人大学生より強かった ( $p < .05$ )。規範性動機は日中大学生が韓国人大学生より強かった ( $p < .01$ )。感情性動機は韓国人大学生が日本人大学生より強かった ( $p < .001$ )。

### 1. 3 考察

#### (1) 自己開示の一般的な様態の導出

本研究では、実証的な研究手法を用いて日中韓大学生の自己開示の傾向を多面的に分析し、各々の開示しやすい話題（「趣味」「年齢」、志向的領域）と相手（親しい相手）、開示意图の高い状況（密接的状況）、自己開示時の考慮要素（聞き手）に多くの共通点が存在することを明らかにした。開示しやすい話題（「趣味」、志向的領域）については、日本人大学生とアジア系留学生を調査対象とした横田（1991）と同様の結果を得た。本研究で見出した日中韓の共通傾向は、文化を越えた自己開示のより一般的な様態を示唆するものと考えられる。今後調査対象を日中韓以外のアジア諸国、欧米諸国などに拡大することによって、自己開示の一般的な様態に関する本研究の結果を検証していくことが求められる。

#### (2) 日中韓の特徴に関する新たな発見

日中韓の自己開示を扱った従来の研究は、日中比較（顧，2010；一二三，2013など）、日韓比較（全，2010；中川，2010など）の二者比較が殆どであり、中韓比較及び日中韓の三者比較を行ったものは見当たらない。本研究は、分散分析と多重比較の統計分析に基づき、日中韓の三者比較を行い、各々の特徴をより客観的かつ明確に記述している。よって、日中韓の自己開示の特徴に関する新たな発見も多くなされた。

開示行動については、初対面の相手に韓国人が日本人より自己開示するという全（2010）の結果に対して、日韓の間には親しい相手への自己開示のみ差（韓>日）が存在することを明らかにした。しかし、開示行動として全（2010）が開示頻度を測定しているのに対し、本研究は開示程度を測定しており、両研究の結果を単純比較することは難しく、今後の研究による検証が待たれる。一方で、韓国人が中国人よりも親しい相手に自己開示をするという本研究の結果は、韓国人の開示行動の特徴（親しい相手への自己開示の高さ）をより明確にした。開示意图については、日中韓の比較を取り上げた研究は皆無であり、韓国人の密接的状況での開示意图の高さを含め、各々の特徴を明らかにした本研究の結果は新たな発見といえる。開示方法については、日本人と韓国人が中国人より文脈等配慮、聞き手選択を好むことを明らかにし、中国人が日本人より文脈等配慮、時間及び場所選択を好むという顧（2010）の研究と異なる結果を

導き出した。開示動機については、日本人が中国人より意図性動機が強く、韓国人が日本人より感情性動機が強く、日本人と中国人が韓国人より規範性動機が強いことを明らかにした。これは中国人が日本人より意図性動機が強く、日本人が中国人より感情性動機が強いという顧(2010)の研究と異なる結果である。

## 2 日中韓大学生の自己開示に関わる意識と問題

### 2. 1 調査概要：ケーススタディ（インタビュー調査）

#### (1) 目的と内容

実際の異文化コミュニケーションにおいて自己開示に関してどのような意識をもち、どのような問題が現れるのかを明らかにするために、日中韓3カ国の大学生を対象としたインタビュー調査を2016年10月～2017年2月に実施した。インタビューの主な内容は、自己開示の仕方、戸惑い、誤解、文化差、配慮などである<sup>7</sup>。

#### (2) インフォーマントの内訳

インフォーマントは、中国、台湾、韓国への留学経験をもつ日本人大学生、日本に留学中の韓国人大学生・中国人大学生、日本への留学経験をもつ中国人大学生の11名である。その内訳を表9に示す。1～9の学生についてはインタビューを日本で実施し、10～11の学生については中国で実施した。

表9 インタビュー調査のインフォーマントの内訳

No.	記号	国籍	性別	異文化との接触経験
1	JM1	日本	男性	中国留学（6ヵ月間）
2	JF1	日本	女性	台湾短期留学（2週間）
3	JF2	日本	女性	台湾短期留学（2週間）
4	JF3	日本	女性	韓国短期留学（3週間）
5	JF4	日本	女性	韓国短期留学（3週間）
6	KM1	韓国	男性	日本留学中（3年間滞在）
7	KF1	韓国	女性	日本留学中（6年間滞在）
8	CM1	中国	男性	日本留学中（2回留学、2.8年滞在）
9	CF1	中国	女性	日本留学中（3年間滞在）
10	CF2	中国	女性	日本留学（1年間）
11	CF3	中国	女性	日本留学（1年間）

### 2. 2 調査結果

#### (1) 日本人大学生の意識

日本人大学生の自己開示に対する主な意識は以下のように示される。

・外国人の方が日本人よりもオープンで何事もはっきり意見を述べる。(JF1・JF2)

<sup>7</sup> インタビューの詳細内容については、目黒・會澤・呉・黄・孟・孫(2017)を参照。

- ・中国人学生の親しい間柄での自己開示の方法は高い親密度を示すもので大変驚いた。(JM1)
- ・韓国人の学生は、日本人なら話しにくいプライベートなことも友人に隠さずに打ち開けている。(JF4)
- ・外国人の自己開示スピードは速く内容も明確だが、日本人は遅い。(JF1・JF2・JF3)
- ・日本人は親しくなった相手に対しても本当にプライベートなことは開示しない。(JF1・JF3)
- ・どこまで開示してよいかわからない。(JF2) / 想いを伝える自己開示の仕方に相違を感じた。(JF3) / 短い滞在期間中、コミュニケーションでは言葉による誤解もあった。(JF4)

日本人大学生は、自己開示の率直性やその速さ、プライベートな内容を含めた自己開示とその程度について中国人大学生や韓国人大学生との相違を意識していることが窺える。また、日本人大学生は自己開示に際して戸惑いや言語的制約も経験している。この点から自己開示への配慮や努力がなされていることが以下のように述べることから窺える。

- ・異文化コミュニケーションでは共通する趣味の話題など相手との共通項を探す。(JF1・JF2)
- ・初対面では相手の出方を見て開示を調節する。(JF3)
- ・外国に渡航した際には、外国人に対してオープンになるので初対面でも深く話をしたい。(JF4)

他方で、「自己開示で戸惑ったことはない」(JF1)、「自己開示の仕方で驚いたことや韓国人が感情的であるようなことは特に感じなかった」(JF4)とする大学生もおり、個々人の意識の相違も窺える。さらに以下の言及においては、自己開示の問題が文化差に起因するだけでなく、異なる文化的背景をもちつつも個人の問題として把握していることが示唆される。

- ・世代間や異性間でも自己開示の仕方は異なると思う。(JF3)
- ・異文化コミュニケーションでの自己開示は、最終的には個人差だと思う。(JF1・JF2・JF3)

## (2) 韓国人大学生の意識

韓国人大学生の意識は以下のように示され、日本人大学生が有する自己開示の相違の意識に対応している。また、相違の意識は異文化コミュニケーションの積み重ねによって減少していく傾向が窺える。

- ・日本人は自己開示をしない人が多い。親しくなった日本人に何でも話したら逆に引かれてしまった。日本人の友人はプライベートな部分を話してくれない。(KF1)
- ・日本人の自己開示のスピードは遅い。(KM1) / 留学当初、考えていることをもっと早く言ってほしいと思っていたが、今は日本人のスピードに合わせて遅くしている。(KF1)
- ・留学当初は話題や反応の仕方が理解できず文化的なずれを感じたが、今はそれほど感じていない。(KF1)

このような相違の意識の減少は、日本人大学生に対する理解の深まりによるものと思われる。理解の深まりは日本人大学生に即した自己開示の仕方や異文化コミュニケーションへの配慮として現れること、さらに日本人大学生と同じように自己開示の問題を個人の問題として捉えていることも以下の言及から窺える。

- ・日本ではストレートな表現は良くないと感じている。日本人大学生はストレートな自己開示よりも人間関係を重視している。(KM1)
- ・文化差が大きい場合は理解に時間がかかる。互いに文化を理解し尊重し合うことが重要だと思う。(KM1) 時間の経過と共に認識が変化していき、誤解やトラブルは自ら解決できるようになった。相手の気持ちを理解し、何事にも積極的な態度が必要だと思う。(KF1)
- ・自己開示の仕方の相違は、年齢的要因も関係していると思う。最初の頃は文化差と思ったが、今は最終的には個人差だと思う。(KF1)

### (3) 中国人大学生の意識

中国人大学生の自己開示に対する主な意識は以下のように示される。

- ・日本人と中国人の間に大きな差が感じられなくなった。(CMI)
- ・来日前に日本の文化を学んだ。日本人は遠慮がちで、自分の意見に関して曖昧ではっきり言わないという特徴があると理解していた。しかし、そのようなイメージと違ってはっきりと自分の意見を言う日本の若者も少なくない。(CF1)
- ・日本語での意志疎通がうまくできなかつたり、誤解を招いたり、親密感を失ったりしたことがあるが、その都度の出来事の内容と関係があり、特に文化の相違によるものではないと思う。(CF2)
- ・自己開示の仕方について文化差はあるが、自己開示のスピードも日本人より中国人の方が速いが、それほど強くは感じていない。(CF2) / 自己開示の仕方の違いは個々人の差だと思う。(CF3)

中国人大学生においても文化差の減少の意識がみられるのであり、文化差よりも個人の問題として異文化コミュニケーションや自己開示の仕方を捉えていることが窺える。このような意識は日韓大学生と同傾向にある。また、異文化コミュニケーションにおける自己開示について各々の大学生が配慮していることも以下のような言及から窺える。

- ・意見対立になった時に日本人は折衷案を提示するなど、異文化接触時の配慮を経験した。(CF1)
- ・日本語での説明の不十分さによる誤解はその場で付加説明をし、誤解が解けた。(CF2)
- ・中国人同士のように話は合わなかった際には、自然に任せる態度を取った。(CF3)

## 2.3 考察

異文化コミュニケーションにおいて自己開示の経験を実際にもつ日中韓大学生は、一方では自己開示の仕方の相違を意識しているのであり、同時に他方ではその文化差の減少も意識している。そして、異文化理解への努力や異文化コミュニケーションにおける自己開示への配慮がなされていること、さらに自他関係の深まりにおいて自己開示の問題を文化差よりも個人の問題として捉えていること、異なる文化的背景をもちつつも各々の文化的相違を越えて問題としていることが理解される。

本研究の質問紙調査で明らかにされたように、日中韓大学生の自己開示の行動、意向、方法の傾向には多くの共通点がみられるが、その動機の傾向には相違点がみられる。このような共通性や相違性を理解することは、異文化コミュニケーションにおける自己開示の配慮へとつながるものである。上述の日中韓大学生の意識は、そのような共通性や相違性を実際の異文化コミュニケーションにおいて体得した反映であろう。異文化コミュニケーションに出会い、その自己開示の仕方の相違に出会うことによって、異文化という新たな視点で異文化を理解する契機、そして異文化の自己開示の仕方を理解する契機をもつのである。それゆえに、自己開示の仕方の文化差の減少が現れるのであり、さらには各々の文化的相違を越えて自己開示を問題にする意識も現れるのである。

異文化コミュニケーションにおける自己開示の問題は、上述の日中韓大学生の個々の意識を問題とすることだけに終始するのではない。人間の自己開示という営みが自文化コミュニケーションにおいて、さらに異文化コミュニケーションにおいて、どのような意味内実を伴うのか、どのような意義を有するのか、自己開示を巡る人間としての在り様が問題になる。日中韓大学生の意識でみられたように、グローバリゼーションによって自己開示の文化差の減少が進む一方で、絶えずその文化的相違が潜在し続けるのである。それゆえに、各々の文化的相違を越え

て人間としての自己開示を問題にすることが求められる。

### 3 自己開示の意味内実の問題と課題

#### 3. 1 開示の二面性

異文化コミュニケーションにおける自己開示の問題は、多岐にわたる考察が必要になるが、開示あるいは自己開示それ自体の意味内実の問題と密接に関連する。

ジュラードは、彼自身が述べているように、実存主義的現象学 (existential phenomenology) に関心を持ち、フッサール、ハイデッガー、サルトル、ブーバー、メルロ＝ポンティから影響を受けている<sup>8</sup>。ハイデッガーは、『存在と時間』において、存在の意味を存在論的に、この意味を問う存在者、すなわち現存在 (Dasein) という独特の述語によって問題にしている<sup>9</sup>。現存在は、自己の存在において、この存在そのものを問題にする存在者であって、このことはさらに次のことを意味するとされる。すなわち、「現存在は、何らかの仕方と明かさにおいて、自己の存在において、自己を理解している。<sup>10</sup>」そしてハイデッガーは、現存在がこの理解に関わっていることを「開示」(Erschließen) という概念によって示している。「この存在者にとって特有なことは、自己の存在とともに、また自己の存在を通して、自己自身に存在が開示されている。<sup>11</sup>」現存在は常にすでに存在理解 (Seinsverständnis) を有しており<sup>12</sup>、現存在において常にすでにこの存在理解が開示されている。それゆえに、ハイデッガーは「現存在は自己の開示性 (Erschlossenheit) である<sup>13</sup>」と述べるのである。

ボルノウは、このように常にすでに開示されている存在理解について次のように説明している。「世界のなかに何らかの仕方ですでに現存し、次に徐々にこの世界の理解へ達する (人間の) 生がはじめに存するのではなくて、世界のなかにある限り、生はすでに常にまた自らの世界を理解し、同時にこの自らの世界のなかで自己自身を理解している。<sup>14</sup>」

このように措定される理解は、常にすでに現存在に属している理解であるが、日常的、前学問的な、すなわち明確な概念規定によって把握されていない「普段の漠然とした存在理解<sup>15</sup>」である。ボルノウもまた、このような存在理解を「前理解<sup>16</sup>」(Vorverständnis) という概念で把握している。前理解とは、人間の認識作用において常にすでに先行する理解であり、それによって人間の生活が営まれている「自然的 (あるいは前学問的) な世界理解と生理解<sup>17</sup>」である。人間は、生活現実における自他の関わりにおいて、常にすでに何らかの仕方ですでに何らかの程度に、漠然としながらも自明的に、自他について理解している。ボルノウは、デイルタイの「生の連関」(Lebensbezug) を引用しつつ次のようにも述べている。「すべての生の連関は常

---

<sup>8</sup> Jourard, op. cit., *The Transparent Self*, p.19

<sup>9</sup> Heidegger, M. *Sein und Zeit*. 1927. 15.Aufl., 1979, S.7, 11

<sup>10</sup> *Ibid.*, S.12

<sup>11</sup> *Ibid.*, S.12

<sup>12</sup> Vgl. *Ibid.*, S.4, 5

<sup>13</sup> *Ibid.*, S.133

<sup>14</sup> Bollnow, O. F., *Philosophie der Erkenntnis*, Kohlhammer Verlag, Stuttgart, 1970, 2.Aufl., 1981, S.31

<sup>15</sup> Heidegger, op. cit., S.5

<sup>16</sup> Bollnow, op. cit., S.104ff.

<sup>17</sup> *Ibid.*, S.31

にすでに生の理解を含んでいる。<sup>18)</sup>

このようにしてハイデッガーの存在理解やボルノウの前理解は現存在あるいは人間の生において常にすでに先行している理解を意味しており、ハイデッガーの開示性はこのような理解が現存在に開示されていることを意味している。したがって彼は「開示」や「開示性」について次のように述べている。「『開示』や『開示性』は、以下において述語として用いられ、『開く』(aufschließen) - 『開かれていること』(Aufgeschlossenheit)を意味するのであり、それゆえに『開示』とは、決して『推論によって間接的に獲得する』というようなことを意味するのではない。<sup>19)</sup>

以上のように、ジュラードが心理学的に問題にした開示や自己開示と、彼に影響を及ぼした実存主義的現象学、特にハイデッガーで示される開示や開示性とは意味が異なる。すでに引用したように、ジュラードの開示は「覆いをとること、明らかにすること、あるいは示すこと」、自己開示は「自分自身を明らかにさせる行為」「他者が知覚しうるように自分を示す行為」であり、他者に自己自身を率直に開き示すことを意味している。他方、ハイデッガーの開示や開示性は、他者に対してではなく、常にすでに自己自身に開示されていること、何らかの仕方では何らかの程度に漠然としながらも存在理解が、換言すれば自他についての理解が自己自身に開示されていることを意味している。このように、ジュラードの開示とハイデッガーの開示には意味の相違が見られる。しかし、この二つの開示には密接な関係があり、自己開示の意味内実の問題もその関係から現れてくる。

### 3. 2 自己開示の意味内実の問題と異文化コミュニケーションにおける自己開示の課題

ジュラードの自己開示は自己自身を他者に開示することであるが、その際、他者に開示される内容、すなわち「覆いをとり」「明らかにし」「示す」ところの当該の自己自身の内容は、ハイデッガーで示された存在理解であり、ボルノウで示された前理解である。これらは、上述したように、常にすでに自己自身に開示されている理解、すなわち自己自身が有する自他についての理解である。日常生活において、人間は自他について何からの仕方では何らかの程度に常にすでに理解しているのであり、自己開示において言語的に表現されるのは自己自身が有するそのような自他についての理解の内容である。そして言語的に表現されることによってはじめ、これまで漠然とした理解が対象化され、意識化され、自他についてのより明確な理解の可能性も現れてくる。

その際、自己開示は特有な自己の在り方に関わる。自己開示は、自己自身が有する前理解を露にし、それを他者に率直に示すことであり、開示する内容が他者にどのように受け入れられるかを前もって知ることはできない。それゆえ、自己開示は自己自身を他者に委ねることであり、自己開示における言語的表現は告白の様相を帯びる。自己開示は「他者にどのように思われるかという潜在的恐れ<sup>20)</sup>」を常に伴うのであり、したがってジュラードは、「自己開示は勇気を必要とする<sup>21)</sup>」のであり、また「自己開示は愛と信頼の態度を伴う<sup>22)</sup>」とする。このことは、

<sup>18)</sup> *Ibid.*, S.35

<sup>19)</sup> Heidegger, *op. cit.*, S.75

<sup>20)</sup> Jourard, *op. cit.*, The Transparent Self, p.144

<sup>21)</sup> *Ibid.*, p.7. Vgl. Otto Friedrich Bollnow, *Das Doppelgesicht der Wahrheit - Philosophie der Erkenntnis*, Zweiter Teil, Verlag W. Kohlhammer GmbH, 1975, S.43

<sup>22)</sup> Jourard, *op. cit.*, The Transparent Self, p.5

本研究の質問紙調査の結果においても把握されたことである。すなわち、日中韓の大学生のいずれにおいても「初対面の人」よりも「親しい友人」に対して自己開示の程度がより高く、親疎関係によって開示程度が異なるのである。

ここに自己開示に要請される人間としての一つの在り方が示される。ジュラードが指摘している自己開示に伴う「愛」や「信頼」は、他者に対する何らかの理解や確実性に基づいた自己の在り方ではない。むしろ、そのような根拠を持ちえないところの他者に向かい合う先立った自己の在り方を示している。他者の信頼性は、また他者に対する愛も同様に、合理的に証明されるようなものではない。他者の信頼性は、ボルノウが述べているように、他者に対して「信頼が先に与えられていること<sup>23</sup>」を意味しているのである。このような自己開示は、その内実を伴わないような雑談や会話とは異なり、むしろ率直に自己を開き示す「対話」(Dialog)、相互人格的な応答関係で成就する対話という独特なコミュニケーションの性格を有する<sup>24</sup>。したがって自己開示には、対話を成就する自己の在り方が要請される。ジュラードもまた自己開示の対話性を指摘し、そして対話を成就する相互人格的な関係の中にある自己の在り方を人間としての「指標<sup>25</sup>」(index)とするのである。

確かにジュラードは自己開示の対話性を心理治療における治療者と患者の関係において問題にしている。旧来の心理治療が「人間による人間への故意の操作<sup>26</sup>」であることを批判し、心理治療における対話的な自己開示の重要性を指摘する。しかし自己開示の対話性は、心理治療の場面のみならず、日常生活における自他関係においても意義を有する人間の在り方である。ジュラードは、自己自身を他者に開示することによってはじめて自己自身を理解すること、そして自己の自己開示は他者の自己開示をも生み出すことについて言及している。「自己開示の相互性<sup>27</sup>」「相互的な自己開示<sup>28</sup>」によってはじめて自他理解の可能性が現れてくるのである。むしろジュラードは、プーバーの『我と汝』(*Ich und Du*, 1923)で示される相互人格的な対話性-主体と客体の関係ではなく、主体と主体の関係で遂行される対話性-に基づき、対話的な自己開示を心理治療の場面に導入したのである<sup>29</sup>。

自己開示の対話性は、自文化における自他関係だけでなく、さらには異文化における自他関係においても意義を有する人間の在り方である。異文化コミュニケーションにおける対話的な自己開示によってはじめて自文化と異文化の理解の可能性が現れてくる。人間は、独自のものの見方、考え方、価値意識を有する個人的存在であり、常にすでに個人的制約を負う存在である。同時に人間は、共通のものの見方、考え方、価値意識を有する文化的社会的存在であり、常にすでに一定の文化的社会的制約を負う存在である。それゆえに、これらの制約性から自己自身を解放する在り方、他者の他者性において他者に向かい合う在り方として、自己開示の対話性が要請される。対話を成就させる在り方が、個人的、文化的、社会的制約性から自己自身を解放させ、自己に同化させずに自他についての新たな意味付与と意味理解を生み出す在り方

<sup>23</sup> Bollnow, *op.cit.*, *Das Doppelgesicht der Wahrheit*, S.111

<sup>24</sup> 対話の性格については、目黒恒夫「ボルノウにおける対話の開示性」『教育思想』第15号、1988年、51～66頁を参照。

<sup>25</sup> Jourard, *op.cit.*, *The Transparent Self*, p.6

<sup>26</sup> *Ibid.*, p.138

<sup>27</sup> *Ibid.*, p.6

<sup>28</sup> *Ibid.*, p.17

<sup>29</sup> *Ibid.*, p.141



である。対話的な自己開示は、開示される事柄について相互に自らを問いの中におき、相互にその事柄について新たな意味付与と意味理解を生み出し、自他についての新たな意味連関を形成する行為である。異文化コミュニケーションにおける対話的な自己開示は、各々の個人的、文化的、社会的制約を負いつつも、人間としての自己の在り方を絶えず問題にし、自他についての新たな意味連関の形成を志向することに収斂していく人間としての営みなのである。

## 結び

本稿の目的は、多面的な量的調査によって日中韓大学生の自己開示の傾向と相違を把握し、留学経験を有する日中韓大学生を対象とした質的調査によって異文化間の自己開示に関わる意識と問題を析出し、そして自己開示それ自体の意味内実の問題及び異文化コミュニケーションにおける自己開示の課題を考察することにあつた。質問紙調査やケーススタディによって把握された自己開示の傾向と相違そして問題は、上述の文化的社会的制約性の反映であろう。

勿論、これらの自己開示の傾向と相違そして問題を文化的社会的制約性の反映として解消することはできない。むしろ、それらを自己開示に包摂される諸様相として把握し、異文化コミュニケーションにおける自己開示の課題として考察することが求められる。自己開示の様態は、自己開示を行う当の人間としての在り方、そして開示される事柄への当の人間としての関わり方の問題を含んでいるのである。ここにおいて自己開示に関わる問題は、畢竟、自己開示を通して自他の意味連関を人間として形成するという課題、自他について開示される事柄を人間として新たに意味付与し意味理解するという課題となる。

異文化コミュニケーションにおいては文化的社会的、そして言語的な制約性が際立たせられる。しかし、これらの制約性を負いつつも他者を他者性として自覚し、対話的な自己開示を遂行していく人間としての在り方が絶えず問題になる。それゆえ、今日のグローバリゼーションにおいて、そして異文化コミュニケーションにおいて、人間の文化的、社会的、言語的制約性を負いつつ、自己開示の在り方、開示される事柄、そして他者の自己開示への関わり方を、自己の自己に対する関わりにおいて、そして自己の他者に対する関わりにおいて、個々の文化と社会を越えて人間として問題にすること、そして多文化社会に生きる人間としての在り方を絶えず志向することが求められる。また、自己開示を通して人間の人間性を問題にし続けることは大学教育においても要請されることであろう。

## 参考文献

- Jourard, S. M., & Laskow, P., "Some factors in self-disclosure." *Journal of Abnormal and Social Psychology*. 56, 1958.
- 石橋玲子「日本人学生と留学生の自己開示の変容」『留学生教育』第14号、2009年
- 遠藤公久「開示状況における開示意向と展示規範からのズレとについて：性格特徴との関連」『教育心理学研究』第37巻第1号、1989年
- 顧佩靈「中国と日本の大学生の対人関係における自己開示のあり方に関する比較研究」『九州大学心理学研究』第11巻、2010年
- 小口孝司「自己開示動機に関する基礎的研究」『応用心理学研究』第15巻、1990年
- 全鍾美「初対面の相手に対する自己開示の日韓対照研究」『社会言語科学』第13巻第1号、2010年
- 一二三朋子「自己開示の前提となる自己観に関する一考察－日本人大学生と中国人大学生の比較を通して－」『文藝言語研究. 言語篇』57巻、2010年

- 一二三朋子「女子学生による自己開示の開示内容面と心理面に関する日中対照研究」『文藝言語研究. 言語篇』64巻、2013年
- 中川典子「日本人と韓国人ビジネスパーソン自己開示に関する異文化比較調査－KJ法による分析結果から－」『流通科学大学論集－人間・社会・自然編』第23巻第1号、2010年
- 目黒恒夫・會澤まりえ・呉正培・黄梅英・孟慶榮・孫成志『共同研究 異文化コミュニケーションにおける大学生の自己開示に関する比較研究－日中韓大学生の比較を中心に－』（尚綱学院大学共同研究報告書）、2017年
- 森脇愛子・坂本真士・丹野義彦「大学生における自己開示方法および被開示者の反応の尺度作成の試み」『性格心理学研究』第11巻第1号、2002年

\*本研究は、尚綱学院大学共同研究（「異文化コミュニケーションにおける大学生の自己開示に関する比較研究」2015～2016年度）の助成を受けたものである。なお、本研究の一部の内容は「異文化コミュニケーションにおける日韓大学生の自己開示に関する比較研究」として大学教育学会第39回大会（2017年6月11日、広島大学）において発表された。